

第31期社会教育委員の会議

第3回定例会

令和6年11月7日

【1】開催日時

令和6年11月7日（木）午後6時30分～午後8時28分

【2】開催場所

教育会館3階 研修室「ぎんが」

【3】出席委員

井上委員（議長）、堀井委員（副議長）、牧岡委員、峯岸委員、近藤委員、佐藤委員、  
豊田委員、吉田委員、新海委員

【4】出席職員

教育委員会事務局

渡邊生涯学習課長、富永社会教育係長、御園生社会教育担当係長、  
大坪社会教育係係員

【5】傍聴人

なし

【6】次第

1 第2回議事録の承認

2 議事

（1）ミドル世代の特徴と傾向①

3 その他

（1）次回日程について

午後 6 時30分開議

○議長 ただいまから第31期社会教育委員の会議第3回定例会を開催したいと思います。

今日は、村内委員が都合により御欠席、新海委員が少し遅れるという連絡をいただいております。

では、議事日程に従い進めてまいります。

まず、第2回定例会議事録の承認でございます。事務局から事前にメールで送付されておりますので、皆さんにはお目通しいただいておりますが、何か訂正等がありましたら、この場でご指摘いただきまして、皆さんと確認したいと思います。いかがでしょうか。

特になければ、承認とさせていただきます。後で何かお気づきの場合には、事務局に連絡をいただきたいと思っております。では、この会議終了後、近藤委員と、これからいらっしやると思っておりますが、新海委員に署名をお願いいたします。

今回の議事録の署名については、吉田委員と堀井副議長をお願いしたいと思いますので、よろしくをお願いいたします。

なお、修正の有無にかかわらず、後日事務局から議事録の完成版が配付されます。

では、本日の議事、ミドル世代の特徴と傾向①に移りたいと思っております。前回の第2回定例会で、社会教育というのは非常に広い範囲でありますけれども、今回はミドル世代をターゲットに考えていったらどうだろうか、という共通理解ができたと思っております。議事録を読んでいただくと、前回の議論の詳細が記されておりますけれども、何か御意見はありますでしょうか。最初に、発言をしておきたいということがあればお話しいただきたいと思っております。

特になければ、第31期の社会教育委員会の会議では、最終的にはミドル世代をターゲットにどのようなことができるか、どのようにアプローチしていけば、行政の取組に関心を持ってもらえるか、ということを少し考えてほしいということでもありますので、本日は、具体的にミドル世代の特徴と傾向などについて意見交換できたらいいなと思っております。よろしいでしょうか。

事務局が資料を幾つか用意しているようなので、まず、その資料についての説明をお願いいたします。

○事務局 それでは、説明をさせていただきます。お手元の資料2はA3版のもの、資料3はホチキス留めのものとなっております。いかがでしょうか。

まず、資料2は前回の定例会での意見交換をまとめたものでございます。大きく問題意

識と右側には提案の2つに分けてあります。また、問題意識から、御覧のように幾つかのキーワードを抽出させていただいております。抽出したキーワード以外にも皆様からこういうのもあるのではないかとこのころもあるかと思いますが、これらのキーワードを基にしながら、先ほど議長からお話があったように特徴と傾向を探る参考になればと思っております。

続いて、資料3でございます。こちらはホチキス留めのものでございますが、インターネットから、特にマーケティング会社からのミドル世代の特徴と傾向の参考となるような資料を掲載しています。全て紹介すると時間がありませんので、簡単に御説明させていただきます。まず初めに、ミドル世代とはということで説明がございます。前回もお話しさせていただきましたけれども、一般的には35歳から55歳までの方々がミドル世代と言われているそうです。

次に、ミドル世代の習い事となっておりますけれども、裏面にかけて図1から図3はミドル世代も含めて20歳から79歳の方を対象にしたデータとなっております。

1枚目をめくっていただきまして、続いて図4から図7です。こちらはミドル世代の関心事や興味などを表したデータとなっております。これを見ていただくとお分かりかと思いますが、例えば図4の「時間の使い方を自分で自由に決められる」では、同居形態別に比較すると、一人暮らしの男性、一人暮らしの女性が高い数値となっており、同居形態によって時間の使い方の自由度に差があることが分かります。

また1枚めくっていただき、図7、ミドル世代の興味関心について尋ねてみたデータがありますが、ミドル世代全体で関心度が高かったのは、国内旅行、グルメ・食べ歩き、テレビ番組・動画鑑賞（映画・ドラマなど）の順となっております。ミドル世代全体で一番低かったのは子育て・教育となっております。また、同居別形態の女性／子どもと同居では37.8%と高い数値となっておりますが、これも当然といえば当然の結果かなと思っております。

最後になりますけれども、3枚目です。F1～M3層とは？各世代の特徴（抜粋）を載せております。このF1からM3ですけれども、Fは女性の頭文字、Mは男性の頭文字を取ったものです。こちらはインターネット、特にマーケティング会社のホームページから世代別の特徴を表したものとなっておりますので、今後の意見交換の参考になればということでお付けしてございます。

資料2の左側の問題意識の⑤、ちょっと文字が小さくて恐縮ですが、「同じ学校の仲間や

職場ではない人たちが、『推し（好き）』を通じて集まることがある。その人たちはお互い知り合いでもないので、名前くらいは知っていても詳細は知らないが、『推し』を通じて接点を持っている。例えば、ストリートピアノも不特定多数だが、そこでのつながりができるかもしれない。これらは行政のやるのとは違い、ミドル世代には届かないというかテイストが違うのではないか、ミドル世代には届いているんです。行政がやるのが届いていないという意味で、申し訳ございません、ちょっと意味を履き違えた表現になっております。御理解いただけただしょうか。

○委員 どう替えればいいですか。

○事務局 抜粋してしまったので、ミドル世代にはその前までのこと、推しことは届いてはいるのですが、行政がやるのとはテイストが違うので、行政がやることには届いていないよという意味合いです。

○議長 また後で修正してください。

○事務局 よろしく申し上げます。

○議長 委員からも資料を頂きました。これについて何か一言ありますでしょうか。

○委員 こちらは、第2回定例会が終わった後に、自分で生涯学習を少し勉強し直さなければと思って、修正点があったら教えてくださいなんていう話をしながら事務局にもお送りしたものです。読んでいただければ、もう釈迦に説法だと思しますので、こういう経緯があってという形なのですが、特にお話ししたかったのは-(9)の最後から3行目に『生涯学習プラットフォーム（仮称）』を構築し、学習機会の提供機能、学習・活動履歴の記録・証明機能、学習者等のネットワーク化機能を高めることを提案」と書いてありますが、このようなことが2016年にはもう中央教育審議会では話されているんですが、あまり目にしたことがないと思うので、こういうのも参考になるかなと思ってお持ちしました。

これ以外にいろいろ30代から50代のミドル世代が活躍できる場面を今度は自分のテリトリーで考えて、学校現場では何かそういうものに関するのではないかなと思ったのですが、昨今になりまして部活動の地域移行化というのがございます。部活動の地域移行化は令和7年～10年までの方針で教育委員会がつくってくださっているんですが、現段階ではコーチである支援員を呼ぶだけの形になっているんですけども、行く末は顧問の業務をもう教員ではなく、地域がやるという形に変えていこうとされているんですが、それにはミドル世代の力が必要になるのではないかな。お仕事とかもあると思うので、全部任せるのは難しいので、そういうノウハウがある方を複数集めて、月曜日は誰とか、

水曜日は誰とか、そういう形でチームを、例えばバスケットだったらバスケットのチームを組んでやっていただくようなシステムをつくりながら、1人が顧問というのではなくて、全員が割当ての日に部活動を見ながら、お仕事があって平日は難しいのであれば、部活動自体を土日だけに限定してやるとか、そういう形で部活動の地域移行化が進んでいくきっかけに、ミドル世代の方の力をいただけたらいいかなと。リンクするものだったので、そのように何かないかなといろいろ考えた中で、もともとどういうものなのかなというので調べたのがこれだったんですけれども、第2回定例会から今日までの間、考えてまいりました。

○議長 それでは、もう一度、第2回定例会での意見交換の概要に戻って、前回どんな発言があったかを押さえた上で、皆さんから御意見をいただこうと思います。

全部は読みませんが、①ミドル世代の定義についてです。年齢では35歳ぐらいから55歳ぐらいをミドルと言うらしいです。この年齢のスペンについてはいろいろな考え方があり、識者によって異なりますが、バブル崩壊後の経済停滞、社会の大きな変化の中で育ってきている世代であり、ライフスタイルとしてはサブカルチャーの影響を受けており、経済の停滞期を経験しているので、割と堅実で、無駄遣いはしない。でも、社会の大きな変化、特にデジタル化やインターネットが普及しましたので、そういったものはよく知っている、というような話が出ておりました。

前回、ミドル世代でも、子どものいるミドル世代については、学校などを通じてわりとアプローチがしやすいけれど、子どものいないミドルにはなかなかアプローチしにくいのではないかと。でも、そういう方も大勢、地域に住んでおられ、もしかしたら、今までそういう方たちに対しての行政の関わりが、どちらかという手薄だったのではないかと、そうした方々をどうやって取り込んでいくのか、という話が出ました。

②で出たのは、ミドル世代はそもそも行政にあまり期待していないのではないかと、自分たちで好きなことをやるのではないかと。そういう人たちと関わるためには、そういう人たちに興味を持ってもらえるような魅力あるものを用意しないと、民間にもいろいろあるので、振り向いてもらえないのでは、ということが出てきました。

スポーツなどについても、いろいろな人が集ってさまざまな活動をするのはいいけれども、スポーツが不得意な方もいるので、どのようにアプローチしたらいいだろうか、というのが④です。

⑤は、最近、「推し」という言葉があるわけですがけれども、昔のようにアイドルを単に

援するだけではなくて、自分から「推し」ていく。「推し」を介した仲間関係を見ると、お互いのことをそんなに深くは知らないけれども、それでも関係性が成り立っている。これまでとは異なる関係性が生まれているのではないかという話です。そんなことが⑤、⑥で出てきています。

その後、コミュニティをどのようにとらえるか、という話になり、必ずしも地縁的なコミュニティだけではなくて、ネットの中でもコミュニティはあり、そういうことをどう考えていくのか、という話もできました。ネットでのつながりを考えたときに、マッチングアプリではないけれども、人と人とをつなげていくようなしかけとして何かできないだろうか、という話題もできました。

⑪は、行政には紙ベースのものだけでなく、ネットを使ったものがないわけではないけれども、なかなか使い勝手のいいものにはなっていないのではないかというような話ですね。

⑬では、敷居を低くして、まず顔見知りになり、偶発的というか、創発的というか、なにか新しい動きに繋げていければいいのだろうけれども、どうやったらできるんだろうかということですね。

⑮はまた少し違う観点ですが、ミドル世代の「なんでそうなのか」というのを深掘りしていったって、考えていく必要があるのではないか、という指摘です。

行政サイドとしては、世田谷というコミュニティをどう豊かにするのか、社会的な資源をいかに活用するかを考えているけれども、ミドルの人たちは、行政のために生きているのではないわけで、これは当たり前ですが、そうすると、行政はどうやって関わっていけばいいのかのアイデアを期待しているという話であります。それが⑯、⑰ですね。

前回もお話ししましたがけれども、第30期の社会教育委員の会議では、教育委員会のみなさんは私たちの話をずっと聞いている立場だったのですけれども、第31期では会議の中に入っただいて、委員と意見交換をするという形にしたらどうだろうかという提案し、皆さんから了承を得られましたので、そのような形にさせていただきます。

議論を進めていく上でのキーワードは「ミドル世代」ですが、「ミドル世代」といっても、子どもがいるミドルとそうでないミドルがいて、先ほど申し上げたように、子どものいない人たちもどうやって取り込んでいくのか、どんなアプローチが必要かということですね。今日では、民間のサービスもいろいろありますが、教育委員会としては、必ずしも行政に期待していない方たちにどうしたら行政サービスに興味を持ってもらい、場合によっては

一緒になってできるだろうか、という問題意識があるということでした。

前回の会議では、おやじの会などの経験をふまえて、ミドル世代の父親を取り込むためには、お祭りとかスポーツ、一緒に汗を流すことがとても有効である、というような話もありました。

ミドル世代は元気ですけれども、病気になったり、年を取ってきたりすると、老後が心配なので、ミドル世代より年上のおやじたちが頑張っている姿を見せることがミドルを動かす最大の活力になるのではないかと、という提案もありました。おやじという言い方をしていますので、子どもを通してのつながりが少し意識されているようにも思われます。逆に言うと、子どものいない世代にも、子どものいるおやじの会みたいな関係性をどう広げていけるかということになるかもしれません。

③は、地域活動や各種ボランティアをすることで、例えば、ですけれども、ポイントのようなものが与えられる仕組みなどがあってもいいのではないかと。現状はないわけですが、ポイントのようなものがあれば地域の活動に関心を持ってくれる人がいるかもしれない。さらに、そのポイントをどんなところで使うかということ、老後の安心のためだけではなくて、地域の飲食店、飲み屋なんかで使えたと楽しいのではないかとというような話もありました。

④では、スポーツに限らず、世代を超えたコーラスとか、お話の会とかいう活動をしているところもある。そういう活動が好きでコミュニケーションできる場があるからできるわけで、そうした仕組みをつくったり、お知らせしたりしていく必要があるのではないかと、という話がありました。

⑥は、町内の掲示板についてですね。どちらかというとオールドメディアですが、そういうのも工夫の余地があるのではないだろうかということです。この地域に掲示板はあるんですよね。

○委員 あります。

○委員 世田谷区の掲示板も随分ありますよね。

私、今日も世田谷区の掲示板にホチキス留めでポスターを貼ってきました。

○議長 世田谷区では掲示板が活用されているのですね。

○委員 町会掲示板もあるし。

○議長 その意味では成熟したまちなんですね。新しいまちでは、ないところもあります。マンションのエントランスには掲示板があるようですが、町内の掲示板とはちょっと違い

ます。

○委員 回覧板もありますよ。

○議長 回覧板は、どちらかというと古いメディアですけども、そういう仕組みが整っていることに着目してもよいかもしれませんね。

⑧は、さきほどお話ししました。

それから、防災なども気になるところです。世田谷では、戸建てでもマンションもそれらが密集したエリアがあり、消防団が組織されています。地方から引っ越してこられた方とか、同じ都内でも新たに世田谷区に住み始めた方もいらっしゃるし、そういう中で、地域の防災についてどう考えていくのかが大事になるのではないのか。

前回の会議では、そのような話が出ておりました。

○委員 大体理解しました。

○議長 次に、資料3の「ミドル世代の時代背景と特徴」についてです。まず、ミドル世代の定義に関しては先ほどお話しいたしました。ミドル世代の「習い事」では、調査対象者が20歳から79歳ということで、ミドルだけではないですが、多いのは、フィットネス、筋トレ、ヨガ・ピラティスといった体を動かすものが多い。そのほかには、ビジネス・キャリアアップ講座なんかもあるというデータですね。どれがミドル世代か、これだと分からない。ただ、こういうものを学習している人がいる。

次のページの「何を重視するか」のデータをみると、「料金が安い」とか「料金に見合った成果を得られる」は当然だと思うんですが、「自分のペースで学べる」「気軽に始められ、気軽に辞められる」「スケジュールなど続けやすいシステム」、そうした点が重視されているようです。

○事務局 そうです。

○議長 サンプル数は2,500なので、統計には十分ですが、なにかの会員に聞いたデータのようなので、統計的な精度についてはよく分かりません。参考にするぐらいですかね。

○事務局 何十項目かありましたが、全項目をダウンロードすると何万円とかかるので、公開しているものだけ抜粋させていただいたところです。

○議長 次もミドル世代についての調査ですが、16歳から84歳が調査対象者なので、その中からミドルを取り出している、と理解してよいのですか。

○事務局 そういうデータになっています。

○議長 1万1033人のサンプルで、調査対象者は16歳から84歳だけでも、その中から30

代から50代のミドルを取り出したデータの様です。つまり、ミドル世代の4803人を母集団として、「一人暮らし」なのか、「配偶者・パートナーのみ」なのか、「子どもと同居」なのか、「親と同居（配偶者・子ども未同居）している」のかで、クロス集計をしたデータということです。ざっと見ると、男性も女性も、「一人暮らし」のほうが自分で時間の使い方を自由に決められるという割合が高いです。「親と同居（配偶者・子ども未同居）」も高いです。「一人暮らし」はもちろん自由に決められますけれども、ミドル世代の場合、どうやら、「親と同居（配偶者・子ども未同居）」でも自由になる時間があるらしい。そして、とりわけ、「趣味を持ちたい」ということの様です。

○事務局 趣味を持ちたいは図5の部分になります。またがってしまったので、ちょっと見にくくなっています。

○議長 ミドル世代は、自分がとことん打ち込める趣味や好きなものを持ちたい、と思う傾向がありそうですね。このデータが統計的に意味があるかどうかは分からないけれども、関心事については、「ミドル世代」で「男性／子どもと同居」だと「スポーツ」の割合が高い。子どもがいることでスポーツへの関心も高まっているかなという感じが、さっき見たときちょっとしました。「国内旅行」については「子どもと同居」でも高くなっている感じがします。「配偶者・パートナー」のみでも「国内旅行」への関心は高い。「女性」では「美容・エステ」にも関心がある。

はっきりとした差がみられるのは、「子育て・教育に関心がある」という項目です。「子どもと同居しているミドル世代」では男性も女性も高い割合が示されていますが、対照的に、「子どもと同居していない一人暮らし」は低いです。「子どもと同居している男性」は、子育て教育は21.2%ですが、「一人暮らし」では、2.2%、「配偶者・パートナーのみ」は2.7%です。これは統計的に有意差がありそうですね。女性の場合も、「子どもと同居している」と「子育て・教育に関心がある」は37.8%ですが、「一人暮らしの女性」では0.5%、「配偶者・パートナーのみ」だと5.6%と、かなりはっきりとした違いがみられます。

次の資料にある「F1、F2、F3」ですが、FはFemaleの略で若い層が1で、中間が2で、やや上の50歳以上が3というように区分されていて、同様にMはMaleで、1、2、3と分けています。F2とM2あたりが、今回、テーマとしているミドルに近い、と思われます。そこで、F2（女性35～49歳）を「家庭を持ち、妻、母といった責任のある立場を任せられることが多い世代」であることを念頭において、データをみていくと、家計を握る傾向にあり、特に大型家電や日用品などの家庭の消費は、F2と密接に関係しているこ

とが読み取れます。さらに、家庭の消費だけでなく、自己投資も惜しまない傾向にあり、エイジング美容や健康ジャンルに興味を持つ傾向が、この調査から読み取れます。F 3（女性50歳以上）の特徴は、子どもが自立していく年代で、金銭的な余裕が生まれやすい、というような理解ができるでしょうか。

男性だと、M 1（男性20～34歳）の特徴は、男女ともに、若いから自己投資に余念がない、トレンドにも敏感である。M 2（男性35～49歳）は、家族の大黒柱となるので消費活動は最も少ない。自分の好きなものにもなかなかお金を使わない、人付き合いにお金をかける傾向がある。対して、M 3（男性50歳以上）は、子どもが自立して、経済力にややゆとりが出てくるようです。こうしたデータは、常識な感覚や理解とまあ一致していると言えそうです。

事務局で用意していただいたこれらのデータは、ミドル世代を35歳から55歳としたときに、各種調査でどんな世代的な特徴が表れているかを見ようとした、ということですよ。○事務局　そういうことでございます。

○議長　もう一つ、委員から出していただいた生涯学習に関する資料がございます。特に、資料の(8)とか(9)あたりが、最近、注目されている事柄ですね。労働市場における変化への対応でも、「コンピテンシー」とか「社会人力」、「リスキリング」などが言われております。「ICTを活用した『生涯学習プラットフォーム（仮称）』」というような構想もありました。教員の研修でも似たようなことが言われていて、要するに、オンラインでの研修情報を充実させて、その人がどういう研修をいつ受けたか、というのがデータとして全部集約され、活用されていく、ということのようです。

現実的にはまだそこまではいっていませんが、近年のAIの急激な進歩もあり、今度はAIを使ってどうやっていくかが議論されていくのではないかと感じます。

○委員　自分で「社会教育」の流れをまとめていく中で、さっき言ったんですけども、最後の「生涯学習プラットフォーム」と「部活動の地域移行化の講師を集める」をリンクできたらと。今は学校の立場でしかお話しできませんけれども、いいなと思ったので、こういうものを進めるような形で資料を提案しました。でも、この間もこのような話が出ていたと思うので、そこの部分を広げていったら面白いのかなと思って提案させていただいたものです。そこに行き着くまでにどうなのかな、外国と日本はどう違うのかな。確かに日本の社会教育はもう既に欧米でやっているようなもの、既に行政、厚生労働省がやっていることも実はあるので、それ以外のところをどうやっていくのかなというようなことな

ので、こういう会議で話し合うのはすごく大変だし、難しいと思うんですけども、その中でも何かいい提案ができたらいいのではないかなと思って持ってきました。

○議長 「未来の教室」実証事業は、文部科学省ではなく、経済産業省が推進していますよね。

○事務局 そういう部分もありますし、我々だと文科省になりますけれども。

○議長 「未来の教室」で「部活動」を検索すると、「部活動の地域移行」についても、いろいろな社会実験的な事例がヒットします。たとえば、ある部活で指導者がいないときには、サッカーだったらサッカーのプレーのビデオを取って指導者に送り、専門的な見地からアドバイスをもらって練習に取り入れていく、というようなことはすでに実現していますが、「未来の教室」を文科省ではなく、経済産業省が進めているというからには、教育界を超えて、広くいろんなところとのつながりを持ちながら考えていかなければいけない話なのかなとは思っています。

○委員 学校教育の中では部活動というのが、今おっしゃったように、講師、指導者がいなくても、自分たちで練習メニューを考えて、それをどうやってやろうかとか、年間スケジュールを決めたりすることがキャリア教育の一環として大事なことだと僕は思っています。だから、うまくなることというよりかは、自分たちでそれをどうつくっていくかというところになるんですけど、保護者とか、いろいろなところから聞こえてくる声には、試合に出るとか、勝つとか、そのような話がどうしても来てしまうんです。本来であれば学校部活動はそういう意味合いなので、地域移行化したときも、それに特化している人というのではなくて、それをマネジメントできる人がいればいいだけであるので、ミドル世代の中に子どもと付き合いがないような一人暮らしの方たちも。部活動は別に学校が終わってからでなくてもいいと思うんです。例えば、御飯を食べてからしてもいいわけですし、塾に行っているのと同じような時間帯にやっていただければ、そういうところで子どもと触れ合う機会をつくりたいなと思っている一人暮らしの人がもしあれば、本当にいるだけでいい。子どもたちに考えさせて練習させるような顧問をやっていただいて、土日に試合と一緒にいきたいような人がいればやるとか、試合で審判ができるような人もいたりなんかしながら、地域移行化を進めていけたらいいなと思っているので、その中でプラットフォームが有効に活用できないかなとは思っております。

○議長 部活動の話にフォーカスされてしまいましたけれども、部活動にはいろいろな問題があって、地域の人とか、子どものいない人であっても、自分に関われるようなことが

あれば関わってみたい、と思うがいるのではないか、ということですね。

○委員 これをプラットフォームとして、うまくつけれないかなというような。だから、今回、私としては、プラットフォームのところを広げていったらいいのではないかなと考えてみたいということです。

○議長 委員は中学校の校長なので、よく知っていらっしゃる部活動の問題に関連させて提案をされましたが、「プラットフォーム」は、部活動以外にもいろいろと応用できるのではないかと思います。口火を切っていただきましたので、この後はそれ以外のこととしてミドル世代をどのようにとらえていけばよいか、について、必ずしも、「子どもがいるか、いないか」に拘らなくてもよいかもかもしれませんが、御意見、御感想などをいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

○委員 子どもの活動をやっている面もあるので、私の周りでは比較的子どもを持っていらっしゃる方が多いんです。見ていると、すごいそうだし、幾つになってもなんですけれども、子育てをしながら。この年代は恐らく40歳前後なので、私は娘が3人いるんですけれども、多分みんなミドル世代だと思ったんですけれども、結婚して子どもがいる方たちはすごく忙しいなと思います。それなら、もういっそのこと、ここでは子どものいない人に焦点を合わせてもいいのではないかなと思ったりするんです。もうちょっと対象が明らかになったほうがやることも明らかになり、こういう人を対象にしようというイメージをもうちょっとはっきりさせたほうがいいかなと思ったんですよ。忙しくしている人も入れれば別にいいんですけども、対象のメインは子どもがいないミドルにしたほうが話は固まっていくかなと思ったんですけれども、どうですか。

○議長 いかがでしょうか。基本的には、その方向で話が展開されていたと理解しています。ただ、子どもがいないミドルに限定すると話がしづらいな、と思って先のような話をいたしました。教育委員会も、子どものいる親御さんたちにはわりとつながりを持っていたという経験があり、地域の方々と一緒に何かをやっていくとしても、例えば、青少年委員の方々などは元PTA役員であった場合が多いようでした。

○委員 青少年委員はまさにそうですね。

○議長 地域にはもちろん、いろいろな人がいるのだけれど、教育委員会のこれまでの経験でも、どちらかというと、子どものいらっしゃる方にはつながるけれども、そうでない人にはなかなかつながりにくい。そういう子どものいない人たちにどうアプローチするか、どうすれば、そうした方たちの興味関心に刺さるような企画ができるかを考えてほしい、

というようなことを事務局からリクエストされたので、そうした方向で議論を進めていければいいかな、と思っております。

とは言いながら、子どものいない人だけをターゲットしなくてはならないわけでもないし、子どものいる人をイメージしてはいけないんだ、となると難しそうなので。

○委員 でも、考えるときにメインの対象をイメージするのはすごく大切かなというだけなんです。

○議長 そこは一致していると思います。

○委員 そうすると、結構時間はありますよね。うちは娘が3人いて、一番下がミドル世代だけれども、子どもはいないので夫婦とも意外に時間があります。だから、そこをイメージして、魅力的な企画を考えるというふうにして、周りを取り込んでいくみたいなことができればいいなと思うんだけど。

○委員 私が勤めていたときは結構お子さんのいない夫婦が多かったんですよ。たまたま私はPTAとおやじの会をやっているんですけど、もう辞めて20年そこそこたつんですが、建設会社だったので、やはり忙しくて、休みは日曜日しかない。その中でも時間を刻んで、子どもと向き合うんだという話をそういう人たちに話したら、隣の地域に住んでいる方はお子さんがいるので、そのお子さんと一緒に小学校に行くんだけど、子どもがいないので入りづらい。私がそういう話をすると、我々はお子さんがいなくてもウエルカムなんですよ。地域に住んでいて、顔見知りが多くなる。そういう話を対象の人たちに聞きまして、どうしたかといえば一緒に行って。その当時まだセキュリティーが強くなかったので、部外者と言っては失礼ですけども、子どもがいなくても、その保護者の知り合いだからということで入れてくれた、すごく喜んでたという話があります。ですから、そういう場づくりですよ。そういう場をつくることの大切さ。

もう一つは、地元ですけども、私だけの感想ですけども、ペットを連れて歩いている御夫婦。私も犬と散歩してお話しすると、結構お子さんがいない方が多いですね。ペットにはすごく親しみを込めて接しますが、人間の子どもとなると、なかなか敷居が高い。なおかつ、今は知らない人との挨拶はなかなか難しい。ですから、腕章をつけるとか、こういうものをつけている人は小学校関係者だから挨拶しよう。全く知らない人はなかなか。挨拶運動はしているんですけども、ペットを連れていらっしゃる方々は、子どもたちも親しみを持つのでしょけれども、ペットがいないときにまちを歩いているときは、子どもたちになかなか溶け込みにくいという話もされていたので、そういう環境があれですね。幾

ら犯罪だ何だで知らない人とは挨拶しない、話をしないという中でも、子どもたちとのコミュニケーション、保護者の人たちとのコミュニケーションを取って、地元の何かを、せっかくここに住んでいるんですから、青少年委員の立場から、子どもを通じて地域、小学校のイベントのお手伝いですとか、防災は今小学校が中心になっていますから、そういうものに取り込んでいける環境をつくりたいなど、青少年委員として活動している中で考えています。

もう一つは居場所です。私、野毛青少年交流センター運営委員をやっているんですけども、小学生から39歳までは青年という立場で利用できるんですが、それ以外というのはなかなか行きづらい。今で言う30歳から55歳のミドル世代で独身の人、子どもがいない人たちのそういう場というのが全くないのではないかと。かといって、野毛青があるから、池青だとか、アップスだとか、青少年交流センターがあるんですけども、利用率を見ると、資本投下かけている割には、これだけ？ という場合もある。運営されている方は、こんなに来ました、こんなに来ましたと言うんですが、我々納税者からすると、そんなに資本投下して、利があるのかなというか、やり方が違うのではないかなと思いつつも、確かに若い世代はそこを利用している方がいる。そうすると、ミドル世代のそういう空間づくり。知らない大人同士がいるんだけど、そこにいて、何となく居心地がいいような箱物を行政とタイアップして造っていくべきではないか。この間の報告書を読ませていただいて、今お話を伺っていて、その3つが案としてというか、雑駁ですが、自分の考え方として思い浮かぶところです。

○議長 犬好きな人は、犬を夕方、朝、散歩して、そこで知り合いになることもあるし、知り合いでなくても、犬同士が近づいていくと挨拶したりしますよね。「わんわんパトロール」という活動は世田谷が発祥だそうですね。

○委員 そうですね。

○議長 わんわんパトロールは、ペットのワンちゃんにお揃いのバンダナをして、子どもたちの登下校の時間に合わせて散歩をしましょう、という活動です。地域住民のみなさんにとって、子どもたちの登下校の見守りというとなんとなく抵抗感があっても、犬の散歩ならばハードルが低くなるということでしょう。〇〇さんちの〇〇ちゃん、と犬の名前で、お互いに交流できるのがいいですよ。

○委員 今学校のイベントはようやく保護者は入れるようになったんですが、おじいさん、おばあさんは駄目よだとか。だから、学校自体が余計ほかの人は絶対入れない空間になっ

てしまっているのです、その辺はちょっと悲しいこと。

○委員 前回はお休みして、すみませんでした。なので、議事録を全部読んで、予習してきました。ああ、こんなふうに変わってきたんだと感じながら読みました。

ミドル世代と言って、まず思いつくのはうちの息子がまさにそうです。長男は家庭を持っていますけれども、次男は独身で、思い切り親と同居していて、お金も十分使って好きなことを究めています。ただ、私を感じるのは、2人とも小学校の後半ぐらいから中学校、高校ととてもいじめがひどかった時代だったので、人と関わることに非常に慎重です。うまくやらなければという思いがあって、とてもうちの子は如才ないので、いろいろな人と関わってはいますけれども、本心を、自分をさらけ出して関わっている人が一体何人いるのかなといえ、お祭りだから集まれと言われても、行かないだろうなと想像ができます。プライベートな時間は好きな人と過ごしたい、地域の人にまた気を遣って敬語でしゃべったりするのは御免だと多分思っていると思います。

もし引っ張り出せる可能性があるとしたら、中年になってきているので、やっぱり体のことは心配だし、筋肉だったものが脂肪になっていっている自分も嫌だし、健康診断とか、スポーツをして健康になろうとか、そういうことは可能性があるかもしれないし、自分が精神的におかしくないだろうかということにも関心があるような気がするのです、若者たちの無料のカウンセリングとかがあったら、それは行く可能性があるのではないかなと思っています。

ただ、みんなでお祭りしようとか、そういうのは御免だという世代と感じています。

○委員 身も蓋もない話になってしまうかもしれませんが、世田谷区として、社会教育、生涯教育、生涯学習というものについて、一体何のためにやろうとしているのか、行き着くところはどのようなものが理想なのか、誰にどうなってもらいたいのかということをもう一度整理していただけないですか。

○事務局 委員からもお話というか、資料を頂いていますが、そもそも生涯学習ですから、生まれてから亡くなるまで一生涯が学びですよということに位置づけられています。それは大体お分かりかと思うんですけれども、その学びは学校教育だけでは完結ではないですよ。卒業した後の自分自身の自己実現も含めて、あるいは人間形成も含めての学びですので、先ほど議長からもありましたけれども、リスキリングとか、リカレントだとか、例えばお仕事を辞めた後にいろいろ知識や技術を身につけた、あるいは仕事上でもっと学びたいとかいうことも含めて生涯学習ですから、これは高齢者だからとかいうことだけでは

なくて、子どもから高齢者の方まで全て含めて、自己実現も含めて学習できる環境を整えていこうというのが我々区の務めであると考えています。

○委員 それは、学習というよりは生涯教育ですね。

○事務局 はい。ただ、今は生涯教育とはあまり言わず、生涯学習と言っています。これはまた長くなりますが、生涯教育というと理念みたいなところがあって、むしろ教育というと学校教育。誰かが先生で、生徒で、一方的に教えられる教育というよりは、主体的に学んでいこうと言われていきますので、生涯学習という言葉が一般的には使われています。生涯学習という中に、学校教育もあったり、家庭教育もあったり、社会教育もあったりということなんです。その社会教育の中では、もちろん個人の学びもありますが、社会とは何かといったいろいろな人たちの集まりですから、そこで行われている学びを社会教育と言います。我々の部分ではいろいろな人たちが出会ったり、触れ合ったり、学び合いながらそれぞれ高め合う。あるいは、分かりやすく言うと、地域だけで問題が解決できると、もっと地域がよくなるよねということで、教育委員会ではないですが、例えば我々が兼務している各総合支所地域振興課では区民講座ということで、区民の生活課題とか地域課題を解決するようなきっかけづくりを目的に行っています。

○委員 なるほど。そうすると、それをやる目的というのは、世田谷区を魅力のある豊かな地域にしていきたいというのが目的ですね。

○事務局 はい。ですから、社会教育法というのがありますが、区の務めとしては環境醸成ということなんです。そういう環境をつくっていくということです。

○委員 今の質問に対してはいいです。

あと1つ、意見として、資料を読み込みまして、これは、ミドルをターゲットにして、その力を高めていくようなお話ですよ。要は学習する側にモチベーションがなければ当然成り立たないですね。そうすると、モチベーションにつながる話というのはあまり出てこないというのが正直なところで、結局それが一番大事なことかなと思うんです。だから、これをやって、あれをやってということは、ここにも明記されていますけれども、ジャストアイデア、私が今見た中でしか言えないですけども、共通するのはやっぱり防災なのではないかなと思っています。というのは、防災は命に関わる話なので。誰しも命は惜しいですから、そこについては間違いなく引っかかりはどこかであると思うんです。それが、いざ、ちょっと見方を変えて、子どもがどうか、お祭りがどうかとなると、多分一気に興味が失せると思うんです。

私はPTA側の人間でした。PTA活動も結構熱心に頑張ってたほうだと自分では思っています。それでも子どもが地元の学校でお世話にならなくなった時点で、残念なことですけども、やはり興味は薄れます。これは正直なところですよ。これが、ましてやお子さんをお持ちでない方となると、子どもを中心に据えても、なかなか吸引力にはならないのかなというのが正直な印象です。ここはやっぱり厳しいのではないかと。そこを据えるよりは、最終的にそこが出てきて、そこが助かるということだと話は何とか進んでいくと思うんですが、子どもを中心にとか、子どもをどうこうという話になってくると、吸引力としては多分厳しい、難しいところがあるのかなと感じました。ですから、ここにも書いてありました。防災は皆さんに共通するところと言われているけれども、確かにそうです。

町会のお話も出ましたが、実は今、町会の加入率は結構下がっていますよね。例えばごみ出しをどうするのかとか、回覧板もしかりですけども、掲示板にしても、関心は相当薄れていると思います。世田谷区がそういった状況にある中で今、我々はこの話題を論じていると思うんですね。そうすると、やっぱり命に関わる防災というのが1つの大きなキーワードになってくるのかなと、これを読む限りではすごく感じた次第です。

話がまとまりませんで、すみません。防災というのはやっぱり魅力的だなと感じた次第ですという意見でございます。

○議長 今までのお話を聞かれていて、どう思われますか。

○委員 居場所づくり、場づくり、魅力的なものを提供すればいいということですけども、先ほどのお話のとおり、個人ですることが。確かにそのとおりだと思うんです。大きなイベントで、この前も喜多見地区区民まつりに行ってきましたけれども、ああいうところには大勢人が来るではないですか。新しい人が来て、そこから何かが起こるかという、どうなんですか、起こらないですよ。1年に一遍、そういう大きなところでみんなで盛り上がり、すごいなとなったり、各地区でとか、学校も含めて、盆踊りとか、そういうお祭り。この間はお祭りが一番人が来ますよねという話で盛り上がっていたけれども、その後はどうするのか。

確かに防災もそうだと思うんですけども、例えば学校を単位とした防災に関連した何かをやっても、集まってくる人が少ない。

○委員 確かにそれはそうですね。

○委員 少ないからと、半強制的に、そこでスポーツをやっている子どもたちのグループの保護者たちをかき集めたりなんていうこともよくやったりするんだけど、来れば一

生懸命やる、あるいは中学生のボランティアをそこに参加させたりしてやるんだけど、そういうことなのかなと。意見はまとまらないんだけど、それだったら今までもやってきているのではないですか。何か新しいことを求めていらっしゃるんですよね。そうではないんですか。

○事務局 新規の事業ということではないですが、今までの事業を振り返ると、ミドル世代が少ないというところはもう確実に出ていますので、そういう人たちが参加できるようなものを何とかしていきたいという思いがあります。ですから、平日の昼間にやっていたら、時間的に絶対無理なわけです。もしかしたら、在宅、あるいは女性だと、育休、産休中で来られるという人も実際にいるんですが、全体からすれば一部なわけですから、そうではない。

ただ、振り返ると、圧倒的に情報として届いていないというのがまず1つあるのではないかな。例えば「区のおしらせ」、高齢者になると圧倒的に高くなるのは分かっているんですが、ミドルの人たちがどのぐらい読んでいるのかという統計は出ていないと思うので分かりません。「区のおしらせ」は新聞の広告と一緒に入ってくるんですけども、最近は新聞を取らない世帯も増えてきていますし、かといって熱心にホームページを見るかという、関心のあることは見るのしょうけれども、そう考えると、圧倒的に情報が入っていないというところがまずあるのかなという気は、個人的にはしております。

○委員 参考になるかどうかあれですけども、用意してもらったところに行くというよりは、自分たちが工夫して、やってもいいよというような何かだと人は集まるかなと思います。例えばフリーマーケットとか、自分たちの収益になるようなこととか、食べ物は世田谷区内では、ラーメンだの、パンだのいろいろありますけれども、ああいうのはすごく集客があるのではないですか。小さい形のそういうものに出店できますよとかとなると、もしかしたら参加するかもしれないとか、新しい人との出会いの場をつくるようなことを狙いとしているのであれば、今までやってきたのだけでは駄目なのかなと話を聞いていて思いました。

○委員 私はミドル世代よりちょっと上かもしれないですけども、さっきの事務局のお話を聞いていて、私のことを言っているのかなというぐらい自分に当てはまることが多くて、実は私は2年前に引っ越しした際に、家族とちょっと離れて1人で生活を始めていまして、子どもを育てたわけでもない地域にぼんと一人で移ったので独居老人のような。行く末はそうになってしまうのではないかというぐらい、同じ建物の中に知っている人がいる

わけでもないですし、近所に親戚がいるわけでもなく、子どもを育てている間は足しげく小学校も、中学校も、言ってみれば高校もPTAの役員をして通っておりましたが、さっき委員がおっしゃったように、子どもが卒業してしまうと足が遠のいてしまいました。以前にも申しあげましたけれども、今はPTAバレーの指導をしに、子どもが卒業した後に建った小学校に足を運ばせていただいています。ただ、自分が地域でどういう立場にいるかという、さっきおっしゃった区報は見ます。「区のおしらせ」は昔からよく読んでいて、自分の得たい情報なんかも載っているのでも区報は見ますが、ホームページはそんなに見ていない。区報は見るけれども、自分にとっていい情報、得たい情報があるときにはすごく参考にさせていただいたり、実際にそこに足を運んだりしますけれども、本当に1か月に2号に出るうちの1か所、2か所だったりします。

子どもはちょっと離れて遠いところにいるので、子どもの話はできないですけれども、そんな中で先日、これはと思ったのは、世田谷区が実施された防災グッズのポイントで欲しいものがもらえますというお知らせが来ましたので、これはもう早速と。今は1人なので、ポイントも30,000ポイントしかないのでも1つのものだったんですけれども、それを発注して、頂く予定になっております。地域では、この前、お祭りがありました、小学校では運動会をやっていたというようなイベントはあるんですけれども、自分の子どもが関わっていない学校ですし、地域にもまだあまりなじみがないので、そこに積極的に自分で参加していこうかなというふうには、さっき委員がおっしゃったようにあまりありません。

そのような参考事例がここにありますので、何かあったら聞いてください。

○副議長 聞いていて、私はあくまでも学識という立場で、私は特に教育行政というよりは、教育経営なので、人、物、金、時間で考えてしまうんですよ。先ほどの議論を聞いていたときに、委員がモチベーション、ニーズベースだろうと。委員は自分のお子さんから、ある意味、カウンセリングとか、癒しを求めているというか、そういう話があったりしたのではないですか。委員からも娘さん夫婦ですか、何を望んでいるのだろうと。だから、出発点は、やっぱりニーズとモチベーションベースでないと駄目だろうと思います。それは、先ほど事務局が言ってくださった、学校教育に比べて社会教育、生涯学習、自発的というところがないといけないので、そういう意味ではニーズ、モチベーションベースでないと絶対食いつかないだろうと思います。

その上で、どうしたらいいのかということと人、物、金、時間で考えると、金と時間は、今

日の調査でもあるように行政ではどうしようもない。時間なんかは特にどうしようもない部分もあるであろう。金の部分は、ひょっとしたら、行政として何かしらの補助とか、そういうものができる部分はあるだろうな。感じたのは、人、物なんです。さっきから言っている物。社会教育行政もそうですけれども、行政のできることにして条件整備、環境整備があるわけですよ。物の面で見ると、先ほど話もあつたように何かしらの物理的な空間、ミドル世代が使えるところは、仕事を終えて帰ってきて、公共施設ではまずないんですよ。なので、民間のジムに行くとか、ネットで探してとか、どこか居酒屋に行くとか、そうならざるを得ない部分がある。だから、物の面は行政としても考える必要があるだろうな。

最後、人の部分が一番重要で、結局社会教育なので、社会教育の定義づけて組織的な教育活動なんです。1人でジムに行っているのは、厳密には社会教育に当たらないという理解でよろしいですか。

○事務局 そうですね。組織的な教育活動となってしまうと。

○副議長 かなり広く捉えれば社会教育でいいかなと思うんですけども、組織的にというと、やっぱり2人以上なので、そこなんです。だから、そういう意味では人と人とのつながりをつくるということは、場と併せて、何かしら行政が提供しなければいけない、支援しなければ駄目だろうな。そうすると、ニーズとモチベーションで考えると、趣味、特技の向上とか、癒しという部分はニーズとしては高いのだろうなということまでは考えました。やっぱり趣味、特技、これをもうちょっと誰かと一緒にやりたいとか、高めたいとか、今日頂いたデータを見てもそういうのが多分あると思いますし、委員からの人と人とのつながりの部分でもそうですよね。祭りには行きたくないとか、おっしやっているんですけど。世代の特徴ではないですけども、ミドル世代は、会社、組織にいるとちょうど中間管理職。上も見なくてはいけないし、下も見なくてはいけない、またさらに横も見なくてはいけないとなると、これ以上プライベートの時間で上も下も横も見たくないというわけですよ。だから、そういう意味では、ある意味フラットな関係でというのもニーズの一つなのではないかなと思います。縦、横と、今は斜めとか言われていますよね。だから、フラットで、縦でも横でもない関係が欲しいというところですかね。

そう考えると、前回もお話したかもしれないですけども、行政版マッチングアプリではないですけども、そういうものがあればいいのかな。例えばこういう趣味で話したいという人がいるよとか、そういうのがアプリでもちゃんと調べられる。例えば私は釣り

が趣味ですけれども、地域で一緒に行ってくれる友達とかはいるんですけれども、もうちょっと近くにいたらいいのかないですか。一緒にどこか行くにしても車でわざわざ拾わなくてはいけないから、もうちょっと近くにいたらいいのかなと思うときに、どうやって探そうとなると、学生を見ていると、やっぱりアプリなんですよ。LINEのコミュニティチャットとかで、こんなのがあるんだというのが私もあるわけです。

でも、私の世代の特徴としてはそこで警戒心が走るんですよ。

○議長 ミドルですね。

○副議長 そうです。思い切りミドル、ミドルのど真ん中ですよ。特徴としてはやっぱり警戒が走るんですよ。危ないのではないか、変なのではないか、怖い人なのではないか。今の若い人は、聞くと、あまりないですよ。だから、行政がそういうものやってくれれば少しは安心感がある、行政版のそういうものがあればいいなというのは率直に思います。

○委員 僕も同じことを思っていて、さっき書いた資料の最後にある「学習者等のネットワーク化機能を高める」のがプラットフォームの1つの役割なので、僕もそれがすごくいいのではないかなと思ってこれをつくってきたんです。そこを広げていって、どうつくるかとか、興味関心とは何なのかとか、そのようなものを話し合えたらいいのではないかなと思います。行政がやっていると、やっぱり安心ですよ。僕も大丈夫かなと思いますから。

○委員 スポーツ振興財団のほうは、世田谷区の千歳温水プールとかをやっているところがあるではないですか。そこは各場所の教室の情報があって、全部見られたり、できたりしますよね。

○議長 皆さんの議論をお聞きしていて、今の時代の本質を捉えているな、と感じております。委員が、子どものいないミドルに焦点化した方がよいのでは、と言われていましたが、最近、読んだ『東京ミドル期シングルの衝撃 「ひとり」社会のゆくえ』（2024年4月に出た）で書かれている内容と、みなさんのお話がたいへん重なっています。委員が「うちの息子、お祭りはいいけれども、そこに参加しようとは思わない」と言われていましたが、この本では、ミドル期シングルの特徴が「お祭りがあれば、眺めたり、そぞろ歩いたりするが、それを地域の人と一緒に担っていくというところには踏み込まない」と描かれています。この本は、宮本さんを中心とする千葉大の家族社会学の研究者たちが書いているのですが、皆さんがおそらく感じられているであろうことがたくさん出てきています。

今後、みなさんと議論を深めていくために、この本の内容を少しだけ紹介しておきたいと思います。こういう問題に対する関心の持ち方、モチベーションと言ってもいいんです

が、それは4つあるとしています。1つは、当事者だから関心を持つという仕方です。「高齢者」になれば、「高齢化社会」の問題に関心を持ちます、「子どものいる世代」だったら、「子育て問題」に関心を持ちます。逆に、子どもがいなかったり、巣立って行ったら、「当事者」ではなくなるから、関心を持たなくなるのも当然ですよ。ただ、それ以外に、「当事者」ではなくても、「当事者の近くにいる人」たちは「当事者と問題や関心を共有する」ことがあります。「ミドル世代の人」は「ミドル世代」に関心があるとは思いますが、「ミドル世代の近くにいる人」、「当事者」ではないけれども、「当事者の近くにいる人」という立場からその問題を考えていく。直接的な「当事者」ではないけれども、私たちが生きる社会の問題として関心を共有したり、それに関する情報交換をしたり、どうすればいいだろうと考えるという関心の持ち方があります。この本の言葉では「市民セクター的な関心」と位置付けられています。自分はミドル世代ではないけれども、ミドル世代の近くにいるとか、当事者ではないけれども、その問題が重要であると考え、議論しているのが、まさにこの社会教育委員の会議で行われていることだ、と整理したいと思います。

それに加えて、本の中に出てくるのは、「市民セクター的な関心」が広がって、システムとしての解決を必要となったときに生まれるのが、「公的セクターの関心」であると。先の「市民的な関心」を受けて、行政が整理あるいは主導しなければいけないことがある、と言っているんですね。これが3番目の関心です。

4つめは「民間的な関心」で、民間で「事業」としてやっていく、という関心がある。例えば、スポーツをやるにしても、本格的なものから、ちょっとだけ、買い物に出たついでに5分でもいいから、というような、最近話題の街中のスポーツクラブがありますよね。そういうニーズというか関心があれば、民間で事業化されていく、ということです。

皆さんの議論は、先ほど紹介した本のなかで研究者たちが論じていることと同じことを捉えているというか、失礼な言い方になってしまうかもしれませんが、とってもよいセンスをお持ちのみなさんである、と感心しております。それをどう生かしていくかをぜひ、事務局には考えていただきたいなと思っています。

今日、まだ一言もお話しされていませんけれども、ミドル世代の課長、いかがですか。  
○課長 いろいろ御意見ありがとうございます。我々としては、区民の方のウェルビーイングの向上のために社会教育を充実させていく必要があるかなということで、課の使命としてやっているわけですが、我々もその中でいろいろ事業をやってはいるんですけれども、参加される方というか、主体としてやっていただける方の高齢化が1つあるかな

と考えています。その方たちの世代交代がうまくいっていないのではないかという課題を我々としては感じているところです。

そういった方たちの世代交代ができて、個人で学習している方はいると思うんですけども、社会の中で教育する、されるという関係に若い世代が入っていけるようにするためにはどういうことが必要なかを考えていく必要があるかなと思っています。こちらとしては、そのヒントを得たいがために、社会教育をそれぞれの地域で体现されている皆さんから、どういう取組、どういう仕掛け、どういうきっかけがあれば若い方たちが参加できるのかという意見をいただきたいなと考えているところです。

実際いろいろな方々と交流しながら、いろいろな事業をされている方たちだと思いますので、我々が考える机上の空論ではなくて、もう少し現場の声、現場レベルでいろいろな意見が出るかなと期待していたところです。例えばアプリだとかの話もありましたけれども、きっかけとして、社会的な仕組みとして整えていけるのか、どうなのか。我々としても考えていく必要があるかなとは思いますが、お金をかけてできる場所、お金をかけなくてもできる場所、切り分けをしながら、実際に区民の皆さんがいろいろな主体として取り組んでいけるようなまちづくりをしていくためにどういったことが必要なか、いろいろ御意見をいただければいいかなと思っています。

○議長 今後、どうしましょう。いろいろなご意見がでていますが、この会議体でできることをしていかななくてはなりませんよね。

本日は、おやじの会の委員はご欠席ですが、委員にもアイデアはありそうですが、そうしたアイデアをどうしていくか、というところですね。事務局としては、今後、どのように展開していこうと、考えているのですか。

○事務局 前回もそうですけれども、私どもの事業の紹介もさせていただいたところなので、そういったところも含めて、こういうものだから参加しにくいのではないかということも含めて、今の課長の話にもありましたけれども、高齢化の問題、活動のマンネリ化もありますし、担い手不足もあつたりするので、そこに定年後の人たちが来るよりは、今のうちから少しでも関わりを持てるような仕組みみたいなことがどうやったらできるのか。今みたいにただ事業をやっても来ないというのはある程度分かっていますので、もう少しこのようにしたらいいのではないか、あのようしたらいいのではないかというところは、まさに皆さんから御意見をいただきたいところです。ちょっと難しいところではあるのですが。

もう一つは、税金というか、公金を使ってやりますので、何でもいいというわけではないんです。やっぱり民間と違うところもありますので、このデータにも載っていますけれども、スポーツはあるかもしれませんが、グルメとか食べ歩きといったときには実施が難しいことがあります。それらを通してまちを知るとかいう目的であればいいんでしょうけれども、直接的な目的になってしまうと、それは行政がやるべきことなのかというのもあるので、分かりやすくその理由づけと言ったらいいんでしょうか。その目的とか、狙いとかにもよってくるかとは思いますが。

ただ、もう少しお話しさせていただくと、やっぱりさっき委員からもお話しがありましたけれども、社会教育には個人の学習もあるんですけれども、相互学習、そういうつながりを含めてそれぞれ学びながら成長していただきたい。それが結果的によりよい地域づくり、コミュニティになっていけばいいなというところはあるんですが、今までみたいに何でもかんでもつながるような形で募集しても多分来ないだろうなと思っていますので、個人の学習、あるいは個人がもっと興味関心のあるようなものから、言葉は悪いですがけれども、引っ張り出すような形で呼んできて、結果的につながっていくようなことをしていけない限りは、なかなかこちらを向いてくれないのではないかなという気はしています。

○委員 だから、顔見知りをつくるというあれですよ。

○委員 例えば場所としては、区民センターとか、まちづくりセンターとか、すぐ場所はあるではないですか。私も年寄りですが、年寄りには行っているけれども、若者からミドル世代は全然行かないではないですか。年に何回か、社会教育主事の方がされている企画も、あまり若者からミドルの方たちが魅力を感じるものではないではないですか。だから、まずはそこから手始めにされるとかするのがいい。年寄りは夜の時間帯はほとんど使わないから、夜の時間帯に焦点を合わせて、その世代の人が仕事帰りに寄るのはしんどいでしょうけれども、魅力的なものであれば、平日夜、世田谷区がやっていて、お安いんだったらちょっと寄ってみようかなとか思うと思います。

○事務局 その具体的な魅力的なものというところが一番難しいところなんです。

○委員 例えばジャズのイベントをやって、カフェではないけれども、ドリンクが一杯飲めて、音楽が聴けるとか、そういうのはいいかなと私なんかは思うけれども。

○事務局 そういう発想が大事かなと思っています。これまではそういうことがなかなかできなかつたりするんですけれども、だからといって、すぐ簡単にできるかというところもあるんですが、そのような発想も含めて、どんどん御意見をいただきたいなとは思って

います。

○委員 さっきからいろいろ話はあったんですけども、僕はこの会に来て、社会教育委員の会議の中で去年はどんな話をしていたかなとか、いろいろ聞いたときに、やっぱりまた学校がターゲットになって、学校が一生懸命やってくださいと言われるのかなと正直思っていたんです。僕は世田谷区民なので、そうではなくて、社会教育として本当の問題点を一番にやるべきではないかなと。30代から50代という形で、しかも、一緒に話し合ってくれている行政の方の姿勢が多分前とは違うのではないかと僕は思うんです。こんなふうには話せているだけで、僕は行政の方は一生懸命やったださっていると思いますし、今お話があったように僕らはいろいろなアイデアを出すべきだと思うんですよ。それを行政に出してくれといっても、それはなかなか難しいものでありますから、委員が話してくれたように、ジャストアイデアでもいいから、いろいろなアイデアを出していくことが僕らの務めなのではないかなと、自分でハードルを上げてしまいましたけれども、そう思いました。

○委員 すみません、またちょっと防災の話になってしまうんですが、結局楽しいことって嗜好ですよ。すごく分かれていますよね。あまりにも多様過ぎる。だから、何をやったところで、多分集まる人間は限定的ですよ。これはもう間違いないことだと思います。

やっぱり私は防災が頭から離れないんですけども、防災は全員当事者なんです。これがポイントです。もちろん世田谷区ではないほかの地域では一生懸命やっけいらっしやる場所もあるかもしれないんですが、例えば、これも身も蓋もない話ですが、ものすごい災害が起きたときに区はどこまでやってくれるのという話ですよ。区は何ができるの？全部やってくれるんだよね？ 助けてくれるんでしょう？ あるいは、避難所、全部区がやっているんですよと、みんな思っていますよ。大概の人はいまだに区がやっているものだと思っていますよ。うちの家族もみんなそう思っていました。だから、それをまず、しっかりと知らしめることはとても重要だと思っています。みんなに関わる問題、何かがあったとき、大変なことが起きたときに、誰も助けてくれないんですよという、要するに生きる力であったり、生き抜く力というところに着目して、これをどう伝えて、何をやるかということはもちろん問題になるんですけども、それを切り口にするのも私はありなのかなと、この1時間半ぐらい頭から離れなくて、ずっと考えていました。

○委員 すごくいいと思うんですが、個人の興味をどうやって防災につなげていくか。要するに個人、今言った一人暮らしとか、ミドル世代が防災のことを本当に考えて、興味が

あるというふうにしていくのをどうするかを僕らは考えなければいけないと思うんですよ。

○委員 もちろんです。その話合いをするべきだという話です。

○委員 そこはすごくいいことだと思いますし、それで興味を持たば意味のあることになると思うので、防災に関して、さっきからニーズからという話をしていますけれども、ニーズから攻めるものもあれば、若い人が防災に関してそんなに考えているかという、そうではないと思います。いかに防災について興味を持たせるか、そういうものを考えついたらいいなと思います。

○委員 それはもう具体論であって、大枠の話ではないので。

○委員 それも僕らは考えるべきと思います。

○委員 防災グッズをくれるというのには大分申込みはありましたか。どんな感じですか。

○事務局 直接のセクションではないので、どの程度かというのは分からないですし、11月末までの申請です。

○委員 たしか末ぐらいまででしたよね。

○委員 何を申し込んだ？ みたいな話をみんなで結構ちょこちょこしていたから。

○事務局 それこそミドル世代ではないですが、高齢の方たちの講座を持っていて、その方たちからは、そういう話はもうかなり頻繁に出ています。

○委員 ジャストアイデアで、僕も送ったんですけれども、できるか分かりませんが、行政では誰に何を配ったか、分かるわけではないですか。その中でターゲットを絞って、独身世代の人に配ったものがあつたときに、今その使い勝手はどうですかというアンケートを出して、防災にこういうものがあるんだけど、協力していただませんかということをやっていけば、もしかしたらその人たちも興味を持つかもしれません。これはジャストアイデアですけれども、そういうこともあるのではないかなと思います。僕も棚をあれするのを頼んだんですけれども、そのように興味関心を持ってもらうような、他区がやっているようなことでもあつたら、そうやっていくのももしかしたらいいのかもしれない。ただのアイデアですが。

○委員 ここにいらっしゃる方々はもちろん感度も高いですし、そういったことにも詳しいですから、避難所というのは町会単位で皆さん頑張ってくれているんですよ、全員ボランティアなんていうことは皆さん分かっているわけですよ。だけれども、そうでない方がほとんどなんです。

○事務局 まだ始めたばかりなので、何とも言えませんが、申請しないミドル世代の方たちがどのくらいあるのかは気になるところであります。

○委員 それはちょっと気になって、興味があるのだろうかと思って。私はみんなに何を申し込んだのか聞いたので、結構申し込んでいるという現状が分かったほうが防災についてもいいかなと思うんだけど。

○委員 まさか区報で、災害が起きても区は何もできませんと言うわけにはいかないではないですか。かといって、全部やりますとも言えない。そこですよ。

○事務局 そうですね。ですから、9月1日号には在宅避難を区長からお願いしているところではあります。

○委員 結局そういうことになりますよね。

○事務局 自助、共助、公助、公助が一番後なので。

○委員 その実態がほとんどの区民の皆さんは分かっていないと思います。全部助けてくれるものだと思います。避難所も区がぱっと用意してくれて、ぱっと行けばいいんでしょうと思っていますよ。

○委員 まず、ミドル世代の人の話を聞きたいですね。ミドル世代の人の話を聞いて、どうしたら参加しやすいかを聞き取るのとミドル世代の保護者、お父さん、お母さん方。私の娘は30歳と29歳で、これからミドル世代に入っていくんですよ。その3世代の人の話を聞かないと。実は私、青少年委員会の会長を務めさせていただいているんですが、青少年委員61名の中で一番年上です。一番若い方とは二回り違うんですよ。会議をやっていて、和ませる、話を出させる。年代が違くと、やっぱり全然発想が違うんですよ。そういう意味では、実際にその年代の人と意見交換して、その中で我々も理解する、その上のお父さん、お母さん方には、今お話があったような、ああ、そうなのかということだし、私の子どもがだんだんミドルになっているときに、親としてこういうことをという話ができる場をつくらないとちょっと……。ここにもミドル世代は何人かおられますけれども、我々ミドル世代ではない者でやっても、がちが明かないのではないかなというのが実際だと思います。

○委員 防災には全く興味を持たないと思います。というのは、自分のこととして捉えるという年ではないので。でも、家族を持ったり、子どもを持ったりすると、それが自分事になるけれども、1人での限り、防災が今自分にとって大事だというふうには思わないし、趣味が広過ぎて、コア過ぎて細分化されているので、今はジャズをやったらみんなが

来るということでもない。自分の好きな音楽を聴くだけなので、それもあまり人集めにはならないだろうなど。そう思うと、何なら集まるんだと思ったときに、それが仕事だって言われたら行くだらうなどと思います。例えば部活の指導も、会社からうちの子に、介護休暇ではないけれども、地域休暇みたいなものがある、中学校にバスケのクラブに行きなさいと言われたら行きますよね。だから、もし世田谷区が本気でやりたいと思うんだったら、職員に地域休暇を出して、町会の会議に出すぐらいの覚悟を持ってやらなかったら世代交代していかないし、大事だったとか、面白いとか、つながりが楽しいとか、そういうことを感じていくかもしれないけれども、そんなことでもない限り、求めているんだから、求めている人をどう引っ張るかなんていったら、そのくらいしかないかなと思いました。

○議長 委員が今、言われたことは、先ほど紹介した本の書かれている論調と同じです。

○委員 そうなんですか。

○議長 先の本では、『『ひとり』社会』、「役割を持たない個人」という観点が示され、そうした人たちをどう考えていけばよいか、ということが論じられています。また、委員が言われた防災については、委員であれば、防災は大事だけれども、地域に顔見知りを増やして、何かあったときに、「よし、やろう！」と連絡を取り合えるような仲間を作ることが大事であり、それが「おやじの会」の活動のベースにある、というような話をしてくれらると思いました。

議長としては、会議の終了時間が気になりますので、そろそろまとめなければいけないんですが、その前に、委員、何かあればお願いします。

○副議長 ミドル世代のニーズ把握が量的にも、質的に必要なのかなと思うんですよ。例えば社会教育委員の会議でアンケート調査とかはできるんですか。小規模でもいいので。インタビュー調査はなかなか来ないと思うんですよ。こんな大人数のところに、夜、来てくださいなんて、それこそお金を払ってくれないと嫌だよと言われてしまいますよ。

○委員 聞きたいですね。

○委員 仕事なら来るね。

○委員 お金を払えばいいのではないかと思うんだけれども。

○委員 生の声を聞いてみたいですね。

○副議長 でも、何を聞くかとか、そういう検討もここでしないといけない。だから、あくまで参考として、何かしらのニーズ把握ができないかなとは思っています。

○委員 会議に求められている意見を言うことはできるけれども、自分の本心を言ったりはしませんよ。

○議長 そうした点も含めて、もう1回事務局で検討していただけますか。今期の社会教育委員の会議が始まった頃に、私から事務局に対して、ミドル世代をターゲットに議論するとしたら、本来は委員の構成そのものを考えなければならないのでは、ということは申し上げてあります。また、例えば、なにか調査をすとか、その分野の専門家を招いて話を聞く、というようなことができますかと伺ったところ、予算の関係で難しい、ということでありました。委員が言われたような「生の声を聞きたい」というようなことは、議論を進めていけば当然感じることでしょうし、委員が言われたように、私たちが何ができるかを考えていくことは大事ですね。次回以降、もう少し、考えてみたいと思います。

○委員 私、若者を支援するネットワークをやっていて、子ども・青少年協議会に出ているんですけども、その場で若者委員が何人か出ているんですよ。最初はどう思っていたか、知らないけれども、今回いろいろな話で、年齢的には自分たちよりも全然高い人たちと一緒に条例をどのように改正していくかとかみたいな話をして、もう2年ぐらいになるんですけども、感想として、自分たちの意見を反映させてもらえることにすごく意義を感じて、やって、とてもよかったと、5、6人ぐらいの方たちが皆さんおっしゃっていて。自分の意見を反映できる会があれば、危機的なミドル世代ももしかしたら違ってくる可能性もあるかもしれないと思っています。希望を捨てないでほしいなどはと思っています。

○議長 もちろん当事者の意見は大事です。この会議体として何ができるのか、次回、今後、なにをどのように展開していけばよいか、今日の議論でも少し出ましたけれども、もう少し具体的な話ができればいいなと感じます。よろしいでしょうか。

事務局でもさらに詰めていただき、幾つかのテーマになっていけばよいと思うのですが。事務局はいかがでしょうか。

○課長 結構です。

○議長 では、本日いただいた御意見は、事務局で整理してください。

○事務局 今幾つか出ていましたので、こちらのほうをまたまとめさせていただいた上で議長とも相談させていただいて、今後の方向性も含めて、またお示しできればと思っています。ありがとうございました。

○議長 お気づきの点があったら、ぜひ、お知らせください。

それから、委員が言われたことについてですが、役所のいろいろな会議体は「縦割り」

の行政の仕組みのなかで完結してしまっていて、他の会議体で擦り合わせるようなところまで、なかなかいかないという問題は確かにあると感じます。現状の仕組みのなかで、さまざまな制約があり、なかなか解決できないようですが、ここはここでやっていくしかないかなと思っております。

では、ちょうど時間になりましたので、今日の会議はこれで終了とさせていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。

○事務局 日程等々についても、次回の中身が決まりましたら、時期も含めて調整させていただきますので、また御協力よろしく願いいたします。

○委員 次回は今年度中ですか。

○事務局 そうです。今年度では4回、考えています。1点だけ、御紹介させていただいてよろしいでしょうか。今日お手元に配らせていただきました「語り合おう！～わたしのまち あなたのまち みんなのまち～ みなまちプロジェクト」のチラシを配らせていただきました。今月30日（土）に世田谷区民会館ホール、午後2時から4時半まで行います。裏面を見ていただくとお分かりいただけるかと思えますけれども、みなまちプロジェクトというのは聞き慣れない言葉だと思うんですけれども、「地域コミュニティづくりを目的に、学校を起点に保護者や町会・商店会、地域団体等が連携し、新たな活動を作り出す〈共創〉を实践できるよう、連携・協働の成功事例となる団体をパネリストにしたシンポジウム」を行います。活動事例を報告される方たちは、今回は世田谷エリアで活動している方たちを選出して報告していただくことになっております。また、そういう団体同士の横のつながりも含めてできたらいいなということで、来年度はまた違う場所のエリアでの開催を考えております。もしお時間がありましたら、ぜひお運びいただければと思えますし、また、関係者の皆様にも御周知いただけると幸いです。よろしく願いいたします。

午後8時28分閉会